

日本語におけるコミュニケーション・バリア：敬語表現と人間関係
の要因の影響<https://doi.org/10.5281/zenodo.15568309>

Nadira KHALMURZAEVA

Ph.D, Associate Professor, The higher school of Japanese Studies
Tashkent State University of Oriental Studies

Annotation. *This study explores communication barriers encountered by Uzbek learners of Japanese, with a particular focus on the role of honorific expressions and interpersonal relationships. Drawing on pragmatics and intercultural communication theory, the research analyzes the cultural, social, and linguistic factors that complicate mutual understanding in Japanese. Key attention is given to how Japan's context-dependent communication style, hierarchical social norms, and the complex system of honorifics (keigo) can hinder effective dialogue, especially among non-native speakers. Survey results from Uzbek learners reveal major challenges including misunderstanding indirect or ambiguous expressions, difficulties in distinguishing between respectful and humble language forms, and psychological barriers when using keigo. The findings underscore that mastering Japanese communication involves not only grammatical proficiency but also a nuanced understanding of sociocultural expectations. The study proposes that teaching strategies should include situational training in natural conversational settings, helping learners to internalize appropriate use of honorifics in various contexts and reduce communication friction across cultures.*

Keywords: *Communication barriers, honorifics (keigo), Uzbek learners of Japanese, interpersonal relationships, cultural, social, and linguistic factors*

序論

コミュニケーションのバリアに関する研究は、現代の言語研究において重要な位置を占めており、異文化間の相互理解で生じるさまざまな困難を含めている。語用論的な観点から、この現象は、対話参加者のコミュニケーション戦略の違い、認知的態度、言語能力レベルおよび社会的環境の特性の違いなどに起因し、祖語理解のプロセスを複雑化にしたり、または歪めたりするバリアとして定義される。

「グライスの協調の原則によれば、円滑なコミュニケーションは、量、質、関連性、方法という 4 つの原則を遵守するかどうかに直接依存しています。これらの違反すると、コミュニケーションの破綻が避けられず、特に日本語のような文脈依存度の高い言語では、必然的にコミュニケーションの途絶につながります。この場合、情報の大部分が暗黙的に伝達されるため、解釈プロセスが複雑になり、誤解が生じる原因となる」【1, 41-58】。

M. ハキモフは、語用論的バリアを、特定の発話状況における発話者と発話対象者の間の発話行為で生じる現象と定義している。彼は、実用的なバリアは人工的に作り出されるか、コミュニケーションの過程で自然に生じる可能性があるかと主張している 【2, 124】。

一方、Kiselyova 氏は、語用論的なバリアはさまざまな要因の相互作用の結果として考察している。その要因には以下のようなものが含まれる。対話者間の社会的関係、対話参加者の言語能力、役割とステータ

スの違い、期待される語用論的な効果（話者の意図と聞き手の認識）。【3, 135-136】。Kiselyova のモデルは、語用論的バリアの発生に影響を与える要因を構造化し、日本語によるコミュニケーションの理解を複雑にする重要な要素を特定するのに役立つ。日本語では、このような要素が重要な役割を果たしている。

コミュニケーションバリアとは、人々がお互いを効果的に理解し合うことを困難にする要因である。日本語と日本文化の文脈では、このようなバリアは、文化的規範、言語的特徴、コミュニケーションの参加者間の地位や役割の違いなどの対人関係の要因によって引き起こされることが多い。日本のコミュニケーション文化は、文脈に大きく依存するものと考えられており、つまり、理解は言葉だけでなく状況、関係、文脈といった暗示的な要素に大きく影響される。

したがって、グローバル化と活発な異文化交流の状況において、コミュニケーションバリアを理解することはますます重要になってきている。日本で働く外国人専門家は、普段の行動パターンが日本人の礼儀正しさや状況への期待と一致しないことがあるため、目に見えないコミュニケーションのバリアに直面することがよくある。

本発表では、文化的、言語的、そして地位・役割に関する 3 つの主なバリアに注目し、それらが相互理解の成功のためにウズベク人の日本語学習者にはどのように影響を与えるかを検討や分析し、特に、日本語における敬語のカテゴリーと対人関係がコミュニケーションのバリアの形成にどのように影響を与えるかを考察し、克服するための可能な方法について試していきたいと思う。

本論

3 つの主なバリアに関する考察について

1) 日本のコミュニケーションにおける文化的バリア

異文化コミュニケーションを困難にする最も重要な要因の一つは文化の違いである。これは、日本人とのコミュニケーションにおける根本的なバリアとなる。エドワード・ホールの理論によれば、日本は高コンテクスト文化に分類される。つまり、情報の多くは言葉で直接伝えられるのではなく、暗示的な文脈、非言語的なシグナル、共通の文化的コードの理解を通じて伝達される。

日本語の会話には、「隠れた表現の仕方」が特徴的であり、意図的に直接的な表現を避ける傾向がある。話し手はしばしば言葉を最後まで言い切らず、「行間に意味を込める」ことを好み、聞き手がその意図を読み取ることを期待する【4, 9】。

このような発話の曖昧さは、日本語において意図的に用いられることが多く、特に相手を傷つけないため、敬意と礼儀を示すために使用される。その結果、日本のコミュニケーションは多義的になりやすく、直接的な「ノー」や明確な反対意見の表明はほとんど見られない。代わりに、婉曲的な表現による丁寧な拒絶や、沈黙による不満の表現が用いられる【4, 9】。

日本のコミュニケーションは、調和の維持を目的としており、そのために意見を曖昧にしたり、対立を避けたり、顔をを守ることを重視されています。このような文化的範囲は、外国人にとって大きなバリアとなり得る。外国人は、日本特有の「空気を読む」という概念に慣れておらず、非言語的なシグナルや発話の裏にある意図を読み取るのが難しい場合がある。このため、曖昧な表現や相手に同調する態度が一般的な戦略として用いられる。例えば、日本人の話し手は、自分の本心とは異なる場合でも、「はいはい」=「うんうん」と相槌を打つことがある。これは、対立を避け、調和を保つための手段であり、必ずしも実際の同意を意味しない。

したがって、礼儀作法や異議の表現方法における文化的な違いは、重大な文化的バリアとなり、誤解を引き起こす要因となる。

次に、こうした文化的誤解を示す具体的な**会話例**を考えてみよう。【5】。

先生: 今日これで終わります。

学生: ご苦労様でした。また、明日会いましょう。さようなら。

先生: ??

以下のとおりに考察をしてい行く。「ご苦労様でした」という表現は、伝統的に目上の者が目下の者に対して使う敬語表現である。そのため、生徒が教師に対してこの表現を使うと、コミュニケーション上の誤りとなる。適切な表現としては、「お疲れ様でした」や「ありがとうございました」を用いるのが望ましい。文化的なバリアの影響は、外国人とのコミュニケーションだけでなく、日本人同士のやり取りにおいても見られる。日本社会には暗黙のルールが存在し、それを破ると違和感を生じさせることがある。特に、集団の調和を乱したり、期待される役割から逸脱したりすると、周囲の人々に不快感を与える可能性がある。

このような現象は、日本語で「違和感」と表現される。違和感とは、文字通り「不一致感」や「場違いな感覚」を意味し、文化的・心理的な要因によってコミュニケーションが困難になることを示唆する【6, 166-181】。違和感が生じると、相手が無意識に距離を置くことがあり、スムーズな対話が難しくなる可能性がある。

立場と役割によるコミュニケーションのバリア

日本の社会は、伝統的に厳格な階層構造を持っており、その影響はコミュニケーションのあらゆる場面に表れている。これまで説明してきた文化的なコミュニケーションの違いが主に話し方のスタイルや言葉の選び方に関わるものだったのに対し、立場によるコミュニケーションの壁は、そもそも情報のやり取りそのものを制限してしまうことがある。たとえば、目上の人に対して意見を率直に伝えるのが難しい、または部下が上司にネガティブな情報を伝えるのをためらうといったケースがこれに当たる。こうしたヒエラルキーの影響は、日本社会のあらゆる場面で見られ、特にビジネスや教育の現場では顕著に表れる。日本の社会では、単なる年齢差や経験の違いではなく、暗黙のルールとして機能する人間関係の枠組みとなっている。

近年、日本国内でも立場による壁を和らげようとする動きが見られる。特に若い世代や国際的な企業では、オープンなコミュニケーションや意見の平等性を重視する傾向が強まっている【6,166-181】。

例えば、多くの日本企業では、欧米式の企業文化を取り入れ、組織内の意見交換を活性化させる取り組みが進んでいる。ブレインストーミングの導入は 役職に関係なく、全員が自由に意見を出せる場を設ける。呼び方の変化 → 「○○さん」や役職名での呼称を増やし、英語風にファーストネームで呼ぶことも心理的距離を縮める工夫し、フラットな関係性を促進し、風通しの良い職場を作る。こうした変化は、日本の伝統的な価値観を尊重しながらも、より柔軟で開かれた職場環境を目指す試みと言える。

日本人は、このような場面で直接指摘することは少ないが、「この人はマナーを知らない」と感じ、信頼関係が築きにくくなることもある。つまり、日本の職場では、明確なルール以外にも「暗黙の了解」を理解することが大切である。

会話例 2: 推薦状の依頼【5】。

生徒: 推薦状をお願いしたいんですが、金曜日必着でお書きください。

この表現は、「金曜日必着」と期限を厳しく指定しており、命令に近い口調になってしまうため、日本の礼儀にそぐわない。日本語では、相手に対して柔らかく願う表現が好まれる。

より適切な表現するためには寧ろ自然な依頼表現に変化する必要がある。

生徒: 推薦状を書いていただけますでしょうか？もし可能であれば、金曜日までにお願ひできますでしょうか。

「～いただけますでしょうか？」→「書いてください」よりも丁寧な依頼表現であり、「もし可能であれば」→期限を押しつけず、相手の状況を考慮する表現になる。「願ひできますでしょうか？」→相手に負担をかけないよう、柔らかい印象を与える。このように、日本語では命令口調を避け、相手の状況に配慮した表現を使うことで、より円滑なコミュニケーションが可能となる。

日本の企業では、役職や上下関係がコミュニケーションに大きく影響する。しかし、海外から来たビジネスパーソンにとっては、こうした暗黙のルールが分かりにくいことがある。

日本では、上下関係があらゆるコミュニケーションに影響を与える。例えば、会議では役職が上の人から発言するのが一般的であり、日常のやり取りでも誰が誰に対してどの程度お辞儀をするかといった細かなルールが存在する。こうしたルールを無視すると、相手に「礼儀を知らない」「攻撃的だ」「信頼できない」と思われることがある。特に、日本の社会では表立って指摘されることは少ないが、内心ではネガティブな印象を持たれることがある。

敬語は、言語を通じたステータス表現は目上の人への尊敬を示すために使われる。年上や上司への敬意は、文化的な価値観はただのマナーではなく、社会の一部として根付いている。ステータスの影響は、話し方だけでなく、発言そのものに影響を与える。若手社員が会議で意見を控えることもある。特に、日本の職場では、部下が上司に悪いニュースを伝えるににくいという問題がある。これは、上司の「メンツ」を守るため、または関係を壊したくないという心理からくるもの。しかし、その結果、重要な問題が経営陣に届かず、意思決定を妨げることがある。

このように、「過度な敬意」が情報の流れを妨げることが「敬意の壁」と呼ぶこともある。日本では、礼儀や序列を重んじる文化が、時としてスムーズな意思疎通の妨げになることがある。

一方で、上司や年長者の立場から生まれるコミュニケーションの壁も存在する。日本の職場では、指示が一方的に下され、部下が意見を述べる機会が少ないことがある。このような環境では、部下は上司の意図や目的を完全に理解できないまま仕事を進めることになるが、「分からない」と質問するのをためらうことが多い。理由のひとつは、質問することで「理解力が足りない」と思われるのを避けたいという心理的なプレッシャーである。

このように、上下関係の距離が大きすぎると、健全な対話が生まれにくくなり、組織のコミュニケーションに深刻な影響を及ぼすことがある。

近年、日本国内でもステータスによる壁を和らげようとする動きが見られる。特に若い世代や国際的な企業では、オープンなコミュニケーションや意見の平等性を重視する傾向が強まっている。伝統的な「先輩・後輩」の文化は今も根付いているが、その厳格さは徐々に緩和されつつある【7】。

日本社会では、過度なヒエラルキーがイノベーションや効率的な業務推進の妨げになるという認識が広まりつつある。そのため、よりインクルーシブ（包摂的）なコミュニケーション環境を整えることが、今後の課題となっている。

言語的なバリア

文化的なニュアンスに加え、日本語の特殊性によって大きなコミュニケーションバリアが生じる。日本語には敬語の体系が豊富にあり、対話相手の立場やコミュニケーションの状況に応じて、言葉や文法形式の選択に厳格な規則が課せられる。実際、同じメッセージでも、文脈や話し手と聞き手の階層的立場によって表現が異なる。同じ考えでも、友人と対人等に話すときと、上司や顧客に話すときとは、まったく違った表現になる。

適切に丁寧語を選び、敬意を表す謙虚な言葉遣いを使い分ける能力は、日本語環境における相互理解の必要条件である。これらの違いを知らない、または認識していないと、自動的にバリアが生まれる。つまり、発言が失礼に聞こえたり、逆に過度に形式的で冷たい印象を与えたりする可能性があります。言葉選びひとつで、相手に与える印象が大きく変わるため、日本語における敬語の習得は、言語的な壁を乗り越えるための重要なポイントとなる。

ビジネスコミュニケーションの研究によると、日本では社会的な序列の理解不足や、場面に応じた敬語の使い分けの誤りが、コミュニケーションの失敗につながる主な要因となっている【8, 83-84】。そのため、日本語を使う環境では、文法や敬語の習得だけでなく、社会的な背景を理解することも重要である。

つまり、会社の社長に対してフレンドリーな口調で話しかけたり、逆に同僚に対して過度に格式張った言葉を使ったりすると、コミュニケーションがうまくいかなくなるということだ。

日本語の言葉遣いには厳格な礼儀作法があり、適切でない敬語の使用は相手に不快感を与える可能性がある。例えば、社長に対してタメ口を使えば無礼と見なされるし、逆に同じ立場の同僚に過剰な敬語を使うと、距離を感じさせたり、皮肉に聞こえたりすることがある。

ビジネスの場面では、言葉遣いのミスが信頼関係の崩壊につながることもある。例えば、メールのやり取りにおいて、本来フォーマルな文体が求められる場面でカジュアルな表現を使ったり、逆に必要以上に敬語や尊称を多用しすぎると、相手が皮肉や冗談と受け取ってしまうケースもある。実際、日本の企業間取引では、「不適切な敬語表現」を理由に取引が打ち切られた事例も報告されている。【9, 129】。

このように、本来相手に敬意を示し、円滑なコミュニケーションを促すはずの敬語は、その使い方を誤ると逆に言語的な壁となり、相手との関係を損ねるリスクを伴う。

敬語の特徴のおかげで、日本語は文脈に応じた細かいニュアンスを表現できるという利点がある。一方で、日本語に慣れていない人にとっては、接辞の違いを聞き取るだけでなく、正しく解釈するのが難しいという問題がある。

こうした文法の複雑さは、日本語を正確に理解する上で大きな壁となる。特に、日本語の文構造や接辞の仕組みを十分に理解していないと、相手の発言の意味を取り違えてしまうことがある。これは、日本語を学ぶ外国人だけでなく、日本語を母語とする人にとっても、時にはコミュニケーションの障害になりうる。

日本語には、主語を明示しないという特徴がある。日常的な会話では、主語や代名詞、さらには話題そのものが文脈から推測できる場合、自然に省略される。

日本語のネイティブスピーカーにとって、これは特に問題にはならない。話の流れや状況から誰が何をしているのかを推測することに慣れていているため、明示的に言葉にしなくても十分に理解できる。【10, 27-33】。

しかし、異文化間のコミュニケーションでは、この特徴が誤解を生む原因となることがある。日本語に不慣れな人にとっては、誰が話しているのか、誰について言及しているのかが分かりにくくなるため、会話の内容を正確に理解するのが難しくなる。

実際、日本語は「曖昧で分かりにくい言語」と表現されることがあり、文脈なしでは、主語が誰なのかを判断するのが困難な場合もある。特に、ビジネスやフォーマルな場面では、誤解を避けるために意識的に主語を補う工夫が必要になることもある。

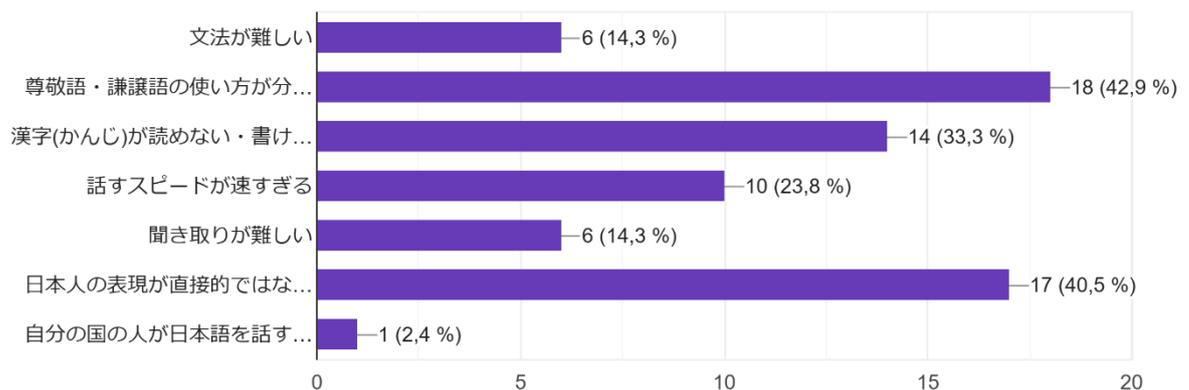
これは、「文脈を読む」文化と「明示的に伝える」文化の違いが引き起こす言語的な壁の一例だ。日本語話者はニュアンスや状況から自然に補完するが、明確な主語を求める言語の話者にとっては、情報が不足しているように感じられることが多い。

人間関係と日本語の敬語表現を含むバリアに関するアンケート調査

この問題を踏まえて、ウズベキスタンの日本語の学習者の中で人間関係と日本語の敬語表現を含むバリアに関するアンケート調査を行った。

1. 日本語でコミュニケーションを取る際にどのような問題がありますか? (複数選択可)

42 отбета



本アンケート調査の間 1 では、日本語でのコミュニケーションにおいてどのような問題が生じるかを尋ね、40名の回答者からデータを収集した。その結果、特に 敬語表現、間接的な表現の理解、漢字の習得、ネイティブスピーカーの話すスピードという 4 つの要素が大きなバリアとなっていることが分かった。

最も多く 42, 5 %の回答者が挙げたのは、「尊敬語・謙譲語の使い方が分からない」という項目と「日本人の表現が直接的ではないため、意味が分からないことがある」という項目を選んだ 40%回答者がいる。

これらの結果から、日本語の敬語表現の習得が多くの学習者にとって難しく、また、日本人特有の間接的な表現が理解しにくいことが課題として挙げられる。である。敬語は日本語の中でも特に複雑な要素の一つであり、単に文法ルールを覚えるだけでなく、場面ごとの適切な使い分けが求められる。このため、学習者にとっては単なる言語知識以上に、日本文化や社会的背景を理解することが不可欠となる。特に、ビジネスシーンやフォーマルな場面での適切な表現の習得には時間がかかる傾向がある。

日本語には、相手の気持ちを尊重し、ストレートな表現を避ける文化的特徴がある。「遠回しな言い方」や「曖昧な表現」が多く使われるため、学習者にとっては単純な単語や文法を理解するだけでは会話の意図を正確に読み取ることができない。例えば、日本人が「考えておきます」と言った場合、必ずしも前向きな返答ではなく、実際には断る意図が含まれていることもある。このような微妙なニュアンスの違いが、外国人学習者にとって大きな壁となっている。

次の項目は「漢字が読めない・書けない」という回答も 30%を占め、依然として多くの学習者にとって漢字が大きな課題であることが分かった。漢字は一文字ごとに複数の読み方があり、また熟語になると意味が変化することもあるため、単純に暗記するだけでは習得が難しいです。特に、日常会話では耳で聞いて理解できても、文字として認識できないケースが多く、読解力向上のためには継続的な学習が必要となる。

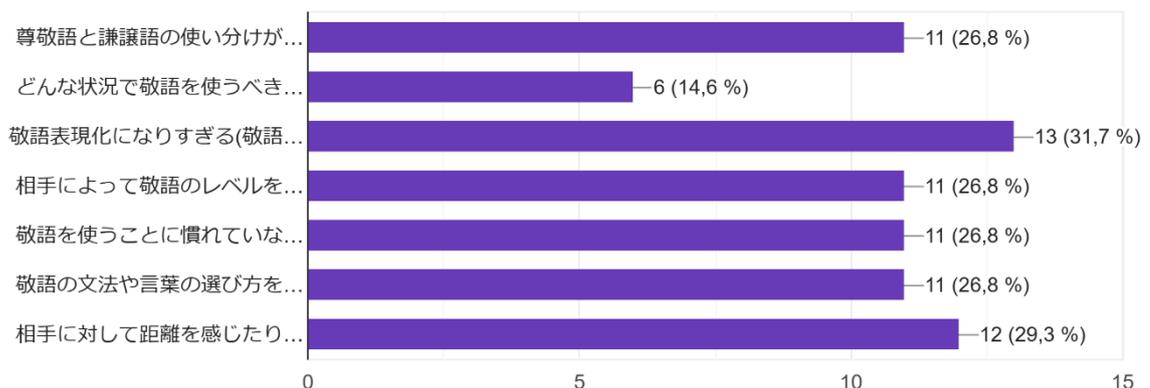
次の項目では、**話すスピードが速すぎる**と感じる学習者は 22.5%となり、日本語の会話は、特にネイティブスピーカー同士では非常に速く、音の省略や連結が頻繁に起こる。このため、「話すスピードが速すぎて聞き取れない」と感じる学習者が多く存在する。特に、カジュアルな会話が加わると、さらに理解が難しくなる。会話のスピードについていくためには、単語や文法を知っているだけでなく、リスニング力を鍛え、実際の会話のリズムに慣れることが求められる。

「**文法が難しい**」と感じる学習者は 15%にとどまり、意外にも他の問題に比べて優先度が低いことが分かった。これは、日本語の文法は一見複雑に思えるものの、一定のパターンを覚えれば比較的習得しやすいと感じる学習者が多いことを示唆している。また、「**聞き取りが難しい**」と回答した人も 15%いたが、これは単に音声の問題だけではなく、文脈や間接表現の影響を受けている可能性が高い。これらの項目は他の問題点と比べると低い割合ではあるが、それでも 15%の学習者が日本語の文法や聞き取りに困難を感じていることが分かる。

「遠回しな言い方」や「曖昧な表現」が多く使われるため、学習者にとっては単純な単語や文法を理解するだけでは会話の意図を正確に読み取ることができないのは日本人とコミュニケーションバリアとなっています。

2. 敬語を使うときにどのような困難を感じますか? (複数選択可)

41 ответ



本アンケート調査の問い 2 では、日本語学習者が敬語を使う際に感じる具体的な困難について尋ねました。回答結果から、敬語の適切な使い分け、状況ごとの判断、話し方の不自然さ、敬語を使う際の心理的負担など、複数の要素が課題として浮かび上がった。

最も多く 31.7%の学習者が感じている困難は、**敬語表現化になりすぎる**ことであった。日本語には、相手に対する敬意を表すための多様な敬語表現が存在するが、学習者の多くは「失礼にならないように」と慎重になりすぎてしまい、結果として過剰にかしこまった話し方になってしまっている場合もあるからです。例えば、友達同士の会話で「ご覧になりましたか？」などを使うと、不自然に聞こえることがある。このような問題は、日本語学習者が「適切な敬語のレベル」を判断するのが難しいことに起因している。

29.3%の学習者が「**相手に対して距離を感じたり、不自然に聞こえたりすることもある**」項目にを占めて、困難を感じた。相手に対して敬語を使うことで、逆に距離感が生まれてしまうことが課題として挙げられた。これは、日本語の敬語が単なる「礼儀正しさ」を表すものではなく、相手との関係性や親密度によって適用範囲が変わるため、学習者にとって混乱しやすい要素になっていることを示している。

アンケートでは次の4つの項目は、「**尊敬語と謙譲語の使い分け**」、「**相手によって敬語のレベルを調整すること**」、「**敬語を使うことに慣れていないと、スムーズに話せない**」、「**考えすぎて話すスピードが遅くなってしまふ**」という項目も同じく 26.8%となっている。

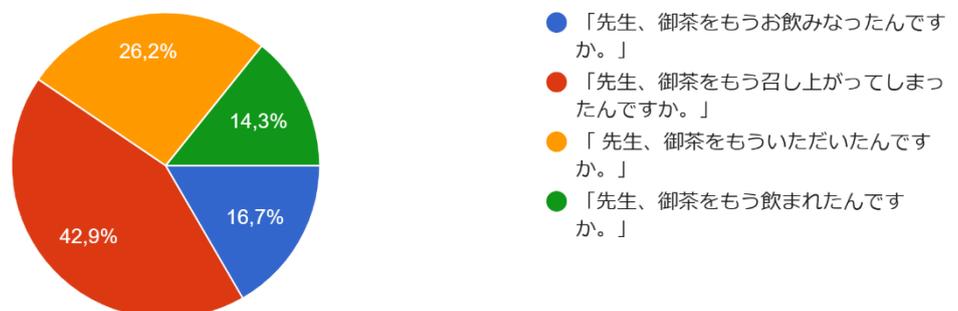
なぜかという、学習者の難しさを感じることは、敬語の文法や語彙の選びに気を取られすぎると、話が途中で止まってしまい、スムーズに会話ができなくなるという問題も見受けられた。これは、日本語の敬語が単なる語彙の置き換えではなく、場面ごとの適切な使い分けが求められるため、**瞬時に判断するのが難しい**ことを示している。

最後の項目では、「**適切な使用場面**」を見極めるのが難しいと感じる学習者が 14.6%となっている。敬語は、必ずしもすべての場面で必要というわけではないが、フォーマルな場では敬語を使うのが一般的だが、カジュアルな会話ではむしろ敬語が距離を生んでしまうこともある。

これらの課題を克服するためには、単なる文法の学習にとどまらず、実際のコミュニケーションの中で自然な敬語表現を身につける**トレーニング**が必要となる。また、学習者が敬語を無理に使いすぎないよう、適切な場面と適度な使い方を理解できるような指導方法も重要である。特に、ネイティブスピーカーとの実践的な会話練習を通じて、敬語の適切な使い分けや、自然な話し方の習得を目指すことが効果的だと考えられる。

3-5. 次の表現のうち、正しい敬語の使い方を選ん... 「先生、御茶をもう飲んでしまったんですか。」

42 ответа



本アンケート調査の第3問では、「先生がすでにお茶を飲んでしまったことを敬語でどのように表現するか」という問いに対し、学習者が適切な表現を選ぶ課題が与えられた。結果を分析すると、敬語の文法的な正しさ

だけでなく、日本の対人関係における序列や敬意の示し方が、学習者にとって大きなバリアとなっていることが明らかになった。

本アンケート調査の第3問いでは、「先生がすでにお茶を飲んでしまったことを敬語でどのように表現するか」という問いに対し、学習者が適切な表現を選ぶ課題が与えられた。結果を分析すると、敬語の文法的な正しさだけでなく、日本の対人関係における^{じょれつ}序列や敬意の示し方が、学習者にとって大きなバリアとなっていることが明らかになった。

日本語学習者に最も多く 42.9% 選ばれたのは「先生、御茶をもう召し上がってしまったんですか。」という表現であった。文法的には、動詞「飲む」の尊敬語「召し上がる」を使っているため、文法上のミスはない。しかし、ここで問題となるのは 学習者が「召し上がる」という言葉を使えば、相手に対する敬意が十分に示されると考えている点である。

実際の日本語のコミュニケーションでは、単に正しい尊敬語を使うだけでなく、話し手と聞き手の関係性を考慮した適切な表現を選ぶことが求められる。今回の例では、「召し上がる」は尊敬語として正しいが、「～してしまいましたか」という言い回しが問題となる。このフレーズには、「もう飲んでしまったのですか？（もうなくなりましたね）」というニュアンスが含まれ、先生という目上の人に対しては失礼に聞こえる可能性がある。

このことから、学習者が 敬語の文法的な正しさに意識を向けるあまり、実際の対人関係における適切な表現の選択を見落としていることが分かる。

次に、「先生、御茶をもうお飲みになったんですか。」という選択肢を選んだ学習者は 16.7%にとどまった。「お飲みになる」は「飲む」の尊敬語表現として適切であり、かつシンプルで自然な敬語表現である。したがって、この表現が最も自然で適切な回答と言える。

この選択肢を選んだ割合が比較的低かったことから、多くの学習者が「お～になる」よりも「召し上がる」を優先する傾向があることが分かる。これは、敬語の学習において「～になる」よりも「召し上がる」などの専用の尊敬語を強調して学ぶケースが多いことが影響していると考えられる。

また、「先生、御茶をもういただいたんですか。」を選んだ学習者は 26.2%だった。この表現は、「いただく」が謙譲語であるため、敬語として誤りである。しかし、ここで注目すべきは、単なる文法の誤りではなく、日本語の敬語におけるヒエラルキー（階層構造）が理解しづらい点にある。学習者がこの表現を選んだ理由として、「先生に敬意を表したい」という意識がある

「いただく」はへりくだった表現なので、使えば丁寧になると誤解しているという2つの要因が考えられる。しかし、実際の日本語では、「いただく」は話し手（学習者）が自分を低めるときに使う表現であり、目上の人への行動には使えない。これは、日本語の敬語体系が単なる「丁寧さ」ではなく、「話し手と聞き手の上下関係を明確に示す手段」であることを意味している。このように、学習者が敬語を使う際には、「単語の選択」だけでなく、「話し手と聞き手の関係性」を常に意識しなければならない。この点が、日本語学習者にとって大きなコミュニケーションの壁となっている。

そのほかに、「先生、御茶をもう飲まれたんですか。」という選択肢を選んだのは 14.3%だった。これは、「飲む」の受身形「飲まれる」を使った尊敬表現で、文法的には間違いではない。しかし、

「飲まれる」という表現がやや硬く、日常会話ではあまり自然ではない受動尊敬は文脈によっては「被害のニュアンス」にも聞こえるという点で、不適切になる可能性がある。

また、「飲まれる」のような受動尊敬表現は、ビジネス文書や公式な場面では使われるものの、対面の会話では不自然になりやすい。このことから、日本語学習者にとって 文法的に正しい敬語と、実際の会話で適切な敬語の違いを理解することが難しいという課題が浮かび上がる。

今回の調査結果を踏まえると、日本語学習者が敬語を使用する際に直面する主な課題は次の3点に分類できる。「尊敬語を使えば丁寧」という誤解 → 実際には文脈が重要「召し上がる」を使えば問題ないと思っているが、実際には「～してしまったんですか」のニュアンスが失礼になることに気づいていない。敬語は上下関係を示すツールであることへの理解が不十分「いただく」のような謙譲語を相手に使うのは不適切だが、「敬語＝丁寧」という認識が強すぎるため、こうした誤用が起こる。敬語の選択が適切でも、相手との関係性を誤ると失礼になる文法的に正しくても、学習者と先生の関係性を考えたときに、学習者が「召し上がってしまったんですか」と言うのは不適切であり、より自然な表現を選ぶ必要がある。

アンケート考察のまとめ

日本語の敬語とコミュニケーションのバリアは単なる文法的な形式ではなく、話し手と聞き手の関係を調整するためのツールである。今回のアンケート調査からも分かるように、学習者が敬語を使う際に直面する問題は、単に適切な語彙を選ぶことだけではない。相手との関係性をどのように表現するかが、実際のコミュニケーションにおいてより重要な課題となる。敬語は単なる言語の一部ではなく、日本の社会文化や対人関係に深く根ざした要素である。そのため、今後の日本語学習においては、敬語の形式的な使い方だけでなく、「どの場面で」「誰に対して」「どの程度の敬語を使うべきか」という、より実践的な指導が必要である。

結論

日本語におけるコミュニケーションの壁は、文化的価値観、言語的特徴、そして社会的ヒエラルキーに深く根ざした複雑な現象である。特に、敬語表現や対人関係のルールは、日本語での円滑な対話を大きく左右する要素となっている。相手に敬意を示すためには、話し手の立場に応じた適切な言葉遣いが求められる。また、日本語の文法は、敬語の階層や多くの接辞を含み、正しい表現の選択を難しくしている。さらに、日本語は高コンテクストな言語であり、多くの情報が言葉ではなく、文脈や暗示によって伝えられるため、非言語的な要素を理解できないと、誤解が生じる可能性が高い。

敬語使用の誤用は、無礼と見なされたり、逆に過度な形式性として受け取られたりするため、話し手は慎重に言葉を選ぶ必要があり、言語的な知識だけでなく、日本の文化や社会規範への深い理解が求められる。

この調査結果から、日本語学習者にとって特に難しいと感じるのは 敬語の使い方 や 間接的な表現 であり、加えて 漢字の読み書き や ネイティブの速い会話 も課題であることが明らかになった。今後、日本語教育においては、これらの問題を解決するための指導方法を工夫する必要があると考えられる。

日本語における効果的な対話を実現するには、社会文化的な適応力を高め、状況に応じた適切なコミュニケーション戦略を身につけることが不可欠である。言葉の表面的な意味を超えて、対人関係の微妙なニュアンスに気を配ることで、コミュニケーションの壁を克服し、相互理解を深めることができる。グローバル化が進む現代において、異文化適応力を養うことは、日本語を用いた円滑な意思疎通を実現するための重要な要素となる。

参考文献

1. **Grice, H. P.** (1975). *Logic and conversation*. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics: Vol. 3. Speech acts* (pp. 41–58). Academic Press.
2. Ҳақимов М. Ўзбек прагмалингвистикаси асослари. – Тошкент: Академнашр, 2013. – Б.124.;
3. Киселева Л.А. Вопросы теории речевого воздействия. – Л., 1978. – С.135-136;
4. Glossika Blog. *How Japan's High Context Culture Influences Japanese*. – 2019 ([How Japan's High Context Culture Influences Japanese | The Glossika Blog](#)).
5. 小川誉子美, & 前田直子. (2003). 敬語を中心とした対人関係の表現: 待遇表現 (日本語文法演習). くろしお出版.
6. Razdorskaya N. V. *Emotional and psychological aspect of cross-cultural communication with the Japanese // Linguistics & Polyglot Studies*. – 2024. – Vol. 10, No.2. – P.166-181 ([\(PDF\) Emotional and psychological aspect of cross-cultural communication with the Japanese](#)).
7. Халмурзаева Н. Т. Проблема определения категории вежливости в японской лингвистике // *International Scientific Review*. – 2016. – №18(28). – С.83-84.
8. Khalmurzaeva N. T. Способы классификации вербальных форм категории вежливости в японском языке // *Theoretical & Applied Science*. – 2019. – №12. – P.27-33
9. Nipino. *Japan's Senpai-Kōhai Culture: Bridging Japan and the Philippines*. – 2023 ([Japan's Senpai-Kōhai Culture - Nipino.com - Bridging Japan and the Philippines Online](#)) ([Japan's Senpai-Kōhai Culture - Nipino.com - Bridging Japan and the Philippines Online](#)).
10. 萩原 喜美子,敬語表現化の工夫に関する考察,待遇コミュニケーション研究,2022,19巻,p. 129,公開日 2022/04/01, Online ISSN 2434-4680, Print ISSN 1348-8481, https://doi.org/10.32252/tcg.19.0_129, https://www.jstage.jst.go.jp/article/tcg/19/0/19_129/article/-char/ja
11. 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店

